

# yubeot 時代の概説（続）

ー yaunmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭から弥生時代中期の土器様式ー

佐藤 剛（（公財）北海道埋蔵文化財センター 和人の研究者）

2021 年 12 月 4 日

## 1 はじめに

本講演では、当該地域について、Ainu 民族が先住民族であることから、引用と固有名詞を除き、yaunmosir(田村すず子 1996、【名】[ya-un-mosir 陸・の・国] 北海道。方言：沙流。E: refers to Hokkaido. (テープ)。ヤウンモシリ。) 島及び周辺諸島（以下、yaunmosir 島）を用いる（佐藤 2020a・2021）（註 1）。また、「続縄文文化」と「続縄文時代」については、「yubeot（ユベオッ・続縄文）文化」と「yubeot 時代」とする（佐藤 2021）。これらのことから「続縄文土器」などの「続縄文」については、「yubeot（ユベオッ・続縄文）」とし、「yubeot 土器」などとする。また、これらのように筆者の力量による可能な範囲において、Ainu 語での表記に努めることとする。

私は昨年に予定されていた本会の講演を今年の 2 月に行い、yubeot 文化・時代について概説した（佐藤 2021）。そこでは、概説を通して、yubeot 文化・時代の枠組みについて、高瀬克範氏が示した考古学的な文化のとらえ方（高瀬 2014）に同意するとともに、主に考古学による土器研究としてのとらえ方、歴史学による現代的な課題としてのとらえ方の 2 つの課題を検討した。その際にいくつかのご意見をいただき、また時間的な制約と私の力量不足により、当該地域の土器群についての課題は検討できなかった。

そのため、今回は引き続き、指摘されたご意見を参考に前稿の補足を行い、主に yaunmosir 島南西部地域の弥生時代中期の土器様式を検討する。なお、先に補足を行うのは、土器群の検討にも関連するところがあるためである。

## 2 前稿の補足

### 2.1 文化と時代の枠組みについて

#### 2.1.1 考古学としての文化区分と時代区分

■考古学的な文化区分について 考古学的な文化区分は、yubeot 文化の「考古学的文化（「共存諸型式の常時的組合せ」（チャイルド 1956））」は「続縄文文化」としての高瀬克範氏の検討（高瀬 2014）があり、大枠で私は同意する。「弥生文化」などについては、それぞれ内容も時期も異なる文化（日本列島における「考古学的大文化」（高瀬 2014））と捉えており、それらの意味では yubeot 文化の規定は「考古学的大文化」と考える。ただし、高瀬氏の検討は結論を急いでいるのではなく、個別の資料については今後の課題によるものが多い。

私の土器群による検討は、高瀬氏の「考古学的大文化」によりつつ、実際の資料をもとに社会のあり方とその違いから yubeot 文化を区分した。この文化が弥生文化や古墳文化などと異なる独自の文化であることは、これまでの yaunmosir 島内での各氏の様々な検討によって明らかになってきたものであると考える。このことは土器研究が、「考古学的大文化」においても貢献できる可能性を示したものとする。この検討はこれま

での各氏による検討とその認識により、土器群から考えて示したものであり、「夜臼式と板付式を通しての、縄文文化と弥生文化の区分と土器群の検討」や「庄内式を土師器とするか弥生土器とするか」などのようにして検討されてきた課題について、「共存諸型式の常時的組合せ」としての遺跡群（遺構・遺物）の理解を通して得られる異なる社会とその文化について、それらの土器群によりどのように考えることができるかを検討した。

■考古学的な時代区分について 私の理解では、考古学はヒトにより遺跡に残されたモノ・コト（遺構と遺物）を通して、その背後にあるヒトを科学する。その理解のための理論的な検討として「考古学的文化」（「共存諸型式の常時的組合せ」（チャイルド 1956））があるのであり、考古学的な文化のとらえ方はこれまでも多くの検討がある。しかし、どのような考えによったとしても、もともとの「遺跡のあり方からヒトを科学する」こととその倫理を逸脱しない限りにおいては、考古学研究から得られる「考古学的文化」のとらえ方は様々である。実際に行われている、現代の考古学（少なくとも日本の考古学）研究は「モノ・コト」の検討を通して、それをういたヒトとその文化・社会のあり方を考えている。むしろ、そうした検討がなければ、「考古学的文化」は単なる物の羅列や事実記載にすぎない。そして、それらは所与のものではなく、考古学的な研究から得られる文化・社会としてのあり方が、「考古学的文化」に還元し、付与されることで、私は歴史になる（このような意味において、日本列島における「考古学的大文化」なのだろう）と考える。このことは、私が考古学は歴史学の一員と考える理由である。

私は縄文土器、弥生土器、土師器、飛鳥時代、奈良時代の土器と yubeot 土器を比較し、yubeot 土器を区分した。縄文文化と弥生文化、古墳文化、飛鳥文化など各文化・時代の研究者では、それぞれの文化のなかでのさまざまな議論は深化しているが、それらの文化の境界域での議論については、土器研究を含めてそのすべてが解決し、共有しているようには思えない。課題を検討している過程だろう。考古学における、日本列島内の各文化・時代の研究者はその各文化・時代の枠組みを持っていることは自明だろうか。もし、ある程度の枠組みを持っているとするならば、多くの場合にその検討が可能なのは、普遍的に出土（位置的にも、量的にも）する、それぞれの文化の持つ土器群のまとまりの枠組みが、その時々を検討により変化はあるものの研究者間に共有され、大まかには機能しているからであろう。その意味で、「続縄文」について各文化・時代の研究者からそれぞれ個別に指摘されてきた点について配慮しつつ検討し、考古学として実際の資料をもとに yubeot 土器による区分を示すことに努め、集落を検討し、それらの検討を踏まえて yubeot 文化・社会の枠組み、それをもって yubeot 時代とする時代区分の枠組みを示したと考える。

当然に、このことは土器のみで文化を捉えることや時代区分することを意味しないし、そのような意図もない。

### 2.1.2 歴史学としての文化区分と時代区分

歴史学としては、なぜ、当然に、縄文研究を主とした山内清男氏と古墳研究を主とした近藤義郎氏の文化と時代の定義などのみから、yaunmosir 島の文化・時代を検討しなければならないのだろうか。「続縄文式」の枠組みがあるために「続縄文文化」は機能し、「発展段階論」があるために「弥生時代」や「古墳時代」が機能すると考えることのみを強要する場合があるのはなぜだろうか。少なくとも現状の考古学においては、過去に行われた「続縄文式」の検討からの「続縄文文化」の規定と「発展段階論」の検討からの「弥生時代」や「古墳時代」の規定とそれによる歴史叙述により、日本列島における yaunmosir 島の文化と時代の歴史認識とその叙述が、大きく良い方向に変わったようには私は思えない。

そのため、これまでに行われてきた検討を踏まえ、考古学的に、当該期における実際の資料に基づいて、文化を区分し、それをもって時代を区分し、新しい枠組みを示した。山内氏は「縄文式」の文化を設定する際に、実際の資料をもとに古墳文化を詳細に検討し、示したのだろうか。近藤氏は「古墳文化」・「古墳時代」を設定する際に、実際のどの個別の資料をもとに縄文文化を詳細に検討して区分したのだろうか。yubeot 研究側にそれらすべてを求めることは、公正ではないと考える。

文化の規定について、弥生文化は「灌漑施設のある水稻稲作文化」、古墳文化は「規格性のある巨大な前方後円墳が象徴する文化が古墳文化」と述べて示すとするのであれば、yubeot 文化は「yaunmosir 島で狩猟・漁労・採集を行う遊動的集落社会の文化が yubeot 文化」で十分と考える。そして、それらのまとまりから得られる時代を yaunmosir 島の時代区分とする。このように、yaunmosir 島の各時代は、政治や社会、経済などさまざまなヒト・モノの総体としての時間的な枠組みと理解して区分する。私は、このような時代区分は、先住民族である Ainu 民族の歴史を叙述し、和民族との共生を考えるために必要であると考えます。

藤尾慎一郎氏は縄文文化を弥生文化などとともに弥生時代に位置付ける（藤尾 2015 など）。藤尾氏の議論は「考古学的大文化」とその中にある「考古学的文化」についての検討と理解する。また、「日本の歴史」として汎日本列島における時代の歴史叙述を強調する。藤尾氏の捉えた各文化は、その個別の文化内容と評価についてのいくつかの疑問はあるが、各地域に固有の文化とする多様性については同意する。しかし、文化の歴史的な多様性についての叙述は全くの配慮がないとは言えないものの、歴史・通史を述べながら、その多様性が何を具体的に示すかの叙述がなく、多様性の指摘をもってその歴史的な責任をそのまま他の研究に引き渡しているようにも見える点があることには同意できない。私は、yubeot 文化は弥生時代を規定する「考古学的大文化」とその中にある「考古学的文化」とは区分し、yubeot 文化は「考古学的大文化」に位置付ける。また、Ainu 民族が yaunmosir 島の先住民族であることとその歴史叙述の必要性について示した。これらのことから、yubeot 文化は弥生時代を規定する文化の枠組みの中にはないと考え、yubeot 時代と区分して叙述し、弥生時代に含めて叙述することは出来ないと考えたい。そして、このことは歴史として「分断」を強調するためのものではなく、「共生」のために必要なことだと考える。

これは逆説的に述べているのであり、学術的にはそれだけではなく、研究者間での共有によるものがあり、これらのみで課題がすべて解決するものではないことは明らかである。

私は特に現在の細分化した研究分野では、研究者自身の専門ではないところは他の文化・時代の研究によって（抛）っていると考える。yubeot 文化・時代の対象とする範囲は広く、縄文から弥生、古墳、飛鳥、奈良の各文化・時代の範囲にわたる。前稿の概説で示したように、ここ 10 年でも yubeot 文化・時代については、様々な立場から多様な検討がある。そのため、今後はそうしたことを yubeot 文化・時代研究側にのみ求めることは、公正ではないと考える。

これらの指摘は、同様のあまり建設的ではないと考える問題を避け、今後に繰り返さないためである。

## 2.2 歴史教育の観点から

Ainu 民族が先住民族である yaunmosir 島の歴史叙述では、yubeot 文化・yubeot 時代を用いて叙述していく必要性を述べた。これは和人の人々の歴史を弥生文化・時代や古墳文化・時代、琉球の人々の歴史を貝塚文化・時代やグスク文化・時代などとするに「等置して叙述する」ことである。歴史叙述は広く行われることから、その影響は大きい。

特に歴史の教育の場では、文化のまとまりとして縄文文化や弥生文化、古墳文化などが用いられる。時代としてのまとまりは縄文時代や弥生時代などが用いられる。yaunmosir 島の文化と時代のまとまりのとりえ方は検討してきたように、それらとは異なる、独自で固有のものである。そのため、私はこれからの Ainu の人々（Ainu 民族）と和人の人々（和民族）の共生を考える立場からは、等置して用いないと、歴史として叙述し、説明することが出来ないと考える。私は、教育は幼いころからなされるため重要であり、そのためには、小児でも理解できるものが必要であると考えます。加藤博文・若園雄志郎編（2018）の「まえがき」では、無理としつつも、古代・中世・近世・近代・現代を用いて Ainu 民族の歴史を通史として提示しており、それは高校までの日本史がこの枠組みを用いているためとする。このように、教育の場での歴史叙述には何らかの枠組みが必要であると考えます。そのため、私が歴史学の一員と考える考古学においては、これが現状では適していると考えます。しかし、他の方法・手法を拒否しているわけではないため、他に適切な方法・手法があれば是非にご教

示をいただきたいし、対話していきたい。

## 2.3 小結

私がこれらの区分を示したのは、他の文化・時代についての研究と同様に、yubeot 文化・時代についても、その実際の資料をもとにした枠組みがなければ、問題が繰り返されるため研究の進展は難しく、いつまでも課題の検討は深化しないと考えたことによる。また、このような文化・時代の枠組みを示さなければ、多数者としての（しかし、自覚のない透明な）和人を中心とする歴史研究と歴史教育の場において、いつまでも堂々巡りの議論と同じ議論が再生産されるしかなくなることを危惧するためである。

私は yubeot 土器の鈴木信氏と大坂拓氏による一連の検討について、「型式」と「細分型式」による解題を通して、基礎的なところでの研究者間での共有が必要なことについて指摘した。私はこれらの文化・時代の枠組みは共有したいが、文化・時代の内容の詳細は、各研究者で異なって良いと考える。そのため、このような yubeot 文化・時代の区分を示したのは、当然に、島内や本州島の各時代の研究者との対話を拒絶しているのではない。

これらのことから、私はこれまでの検討とその成果の研究者間での共有により、yubeot 文化とその時代について、この yaunmosir 島の固有の文化・時代とするには十分である、と捉える。このことは、検討する必要がないと述べているわけではなく、高瀬克範氏による検討やこれまでに遺跡の理解から示されてきた各氏の叙述により、現状では私は十二分であると考え、今後も検討していく必要はある。私の示した yubeot 文化とその時代の枠組みは、縄文文化、弥生文化、古墳文化ではない、それらと等置して叙述する、yaunmosir 島に固有の独自の社会とその文化、その時代である。私は、これらのことを持つのみ文化と時代を考えるとこの意図は全くない（佐藤 2021：27 頁など）。そして、この検討が十分でなければ、その課題についてそれぞれの立場から検討し、対話を続けていきたい。

そのため、現状での歴史の叙述はそれぞれの文化により規定する時代区分名を用いて行うことが公正（佐藤 2020a・2021）と考える。

## 3 yaunmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭から II 期併行期の各型式及び土器群について

### 3.1 各型式及び土器群の地域と時期の位置付け（第 1 図）

型式論として、島南西部地域の yubeot 時代初頭から弥生時代中期の資料については、近年では大坂拓氏による一連の検討がある（大坂 2007・2010・2011・2013・2015）。また、関連する本州島東北部地域での当該期の土器研究は盛んであり、斎野（2011）や佐藤祐輔（2015）などの多くの検討がある。

島南西部地域における当該期の土器群は、尾白内Ⅱ群（千代・石本 1981）（尾白内遺跡出土Ⅱ群土器群など）、下添山式（吉崎 1982）（下添山式土器群）、恵山式（名取 1960）（恵山式土器群）である。筆者の検討（佐藤 2021）では、大坂拓氏（2007・2015）と斎野裕彦氏（2011）により、尾白内Ⅱ群は yubeot 土器（yubeot 文化の土器）であり、弥生時代前期末葉の砂沢式併行期にあたる yubeot 時代初頭、下添山式土器群は弥生土器（弥生文化の土器）で弥生時代中期前葉の二枚橋式に併行する土器群である。恵山式土器群は弥生土器（同）で、恵山Ⅱ式（大坂 2007）が弥生時代中期後葉主体に位置付けられ（佐藤 2020b）、そのことから恵山Ⅰ式（大坂 2007）は中期中葉主体に位置付けることができる。

## 3.2 各型式及び土器群の遺跡でのあり方

### 3.2.1 尾白内Ⅱ群（森町尾白内遺跡Ⅱ群土器群など）

尾白内Ⅱ群は当該地域に分布し、型式に類似するものとする yubeot 時代初頭の土器群（佐藤 2011・2014）に併行する土器群である。松山地域では兜野式が設定されているが、現状では地域的な相違は明らかになっていない。

大坂氏（2015）は、砂沢式とその併行期について「砂沢式古段階（梨ノ木平段階）に並行する資料は道南では出土しておらず、新段階（戸沢川代段階）に相当する資料も国立療養所裏遺跡（石本編 2000）で僅かに出土するのみ」で、「主体を占めるのは道央部と共通性の高い「尾白内Ⅱ群」（千代・石川 1981）」とする。

### 3.2.2 下添山式（北斗市下添山遺跡出土土器群など）

下添山式は当該地域に分布する、弥生時代中期前葉を主体とする二枚橋式・宇鉄Ⅱ式（斎野 2011）に併行する土器群である。

大坂氏（2015）は、二枚橋式は「先行する砂沢式に比べて変形工字文を構成する沈線が多条化すること、台付浅鉢の台部が曲線的な鐘形に変化することなど」により、「津軽・下北半島の砂沢式から連続的な変遷を跡づけることが可能」で、「北海道の噴火湾沿岸の豊浦町礼文華遺跡（松田・青野 2003）や伊達市南有珠 7 遺跡（などで多量に出土する）」とする。また、下添山遺跡出土土器群については、大坂氏（大坂 2007・2015）は恵山Ⅰa 式に含め、二枚橋式は二枚橋遺跡出土土器に限定する。また、大坂氏（2010）では、津軽平野南部地域では砂沢式に後続するものとして、五所式、垂柳 1 式、垂柳 1 式、垂柳 2 式、垂柳 3 式の型式変遷を認める。五所式および垂柳 1 式が二枚橋式と、垂柳 2 式が恵山Ⅰa 式と、垂柳 3 式が恵山Ⅰb1 式とそれぞれ並行関係にあるとする（大坂 2010）。

私は大坂氏の検討（大坂 2007・2010・2015）について、恵山式のなかに、二枚橋式に後続する土器群として下添山式を含めることには賛同できない。下添山式は当該地域の二枚橋式併行の土器群として設定されているものであり、遺跡から出土するまとまりのある土器群として型式を認識されている。その立場からは、大坂氏の検討は自身の設定する「細分型式」（佐藤 2020b）の検討のためのものであることから、それを理由として「型式」をまとめることには同意できない。型式は遺跡層位的に出土したものを分類したもので、斎野氏（2011）による広域的な編年などのように、研究者間での共有のために必要なものである。その枠組みを越えて土器群の系統性を検討し、対比することとは、別の問題として扱う必要があると考える。型式を扱う場合には前後左右の型式も尊重することであり、文様などの系統性から型式をまとめる際にはこのような配慮が必要であろう。

大坂氏による当該期の土器群における系統性の検討は理解するため、型式の理解の相違と捉える。

### 3.2.3 恵山式（茂別遺跡出土土器群、南川遺跡出土土器群など）

恵山式は当該地域に分布する、弥生時代中期中葉の田舎館式（田舎館 2・3 群）から後葉の大石平Ⅵ群 2・3 類など（斎野 2011）に併行する土器群である。当該地域では茂別遺跡出土土器群、南川遺跡出土土器群などのように、各遺跡からまとまりをもって、時期差を伴い出土する土器群である。筆者の力量により、竪穴住居の変遷のみを確認する。

茂別遺跡では、工藤研治氏によれば、遺物包含層から出土した二枚橋式の壺型土器とごく少量の後北 C1 式を除きほとんどの続縄文土器が恵山式（Ⅵ群 B 類）である。各遺構及び包含層出土の資料については、「現時点では西桔梗 B2 遺跡の資料（千代編 1984）の段階から大中山 5 遺跡の資料（七飯町教育委員会 1983）の段階にかけてのもの」とした（工藤 1998）。竪穴住居では、立田理氏の検討により、H-2 の堀上げ土の観察から、H-3（一番古い）と H-2（古い）、H-4（新しい）の前後関係が得られている（立田 1998）。

南川遺跡では、高橋和樹氏によれば、恵山B式（峰山 1968、中村五郎 1973）に相当する南川Ⅲ群と恵山A B式（中村 1973）に相当する南川Ⅳ群の土器群が認識されている（高橋 1976）。竪穴住居では、田部淳・加藤邦夫両氏によれば、Ⅰ期の南川Ⅲ群土器を主体に出土する第1・2・4・6・12・14・(15)号竪穴住居跡とⅡ期の南川Ⅳ群土器を主体に出土する第16・19・20・22号竪穴住居跡の時期差がある。さらに、Ⅰ期は乳白色火山灰の竪穴窪地での確認状況から、落ち込みが確認できたⅠA期の第1・13・14・(15)号竪穴住居跡と確認できなかったⅠB期の第2・4・6・12・17号竪穴住居跡に細分している（田部・加藤 1983）。

恵山式の変遷については、これまでの検討により茂別遺跡出土土器群から南川Ⅲ群土器群、南川Ⅳ群土器群への変遷が共有されている（大坂 2015 など）。そのため、本稿では前項の検討により、遺跡ごとのまとまりである茂別期（茂別遺跡の時期）、南川Ⅲ群期（瀬棚南川遺跡Ⅲ群土器群の時期）、南川Ⅳ群期（瀬棚南川遺跡Ⅳ群土器群の時期）に大きく区分する。さらに各遺跡で得られた遺構と遺構群の新旧により、茂別期はH-3期、H-2期、H-4期とする。南川Ⅲ群期はⅠA期（第1・13・14・(15)号竪穴住居跡出土土器群）、ⅠB期（第2・4・6・12・17号竪穴住居跡出土土器群）、南川Ⅳ群はⅡ期（第16・19・20・22号竪穴住居跡）と細分する。

## 4 yaunnmosir 島南西部地域の yubeot 時代初頭からⅡ期併行期の土器群の細分について

### 4.1 各型式及び土器群の細分

各型式及び土器群は、前項で検討した竪穴住居の床面・床面直上・生活面・覆土下部出土資料について、辻秀人氏の細別器種と様式の理解（辻 2005）により検討する。時期区分は遺跡ごとのまとまり（茂別期、南川Ⅲ群期、南川Ⅳ群期）で検討する。

なお、尾白内Ⅱ群については前稿（佐藤 2021）でも指摘したように、yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）と考えられることから、別の様式であることは明らかなため、大まかに対比する。

#### 4.1.1 甕（第2～5・9図）

法量により、器高 45cm 前後以上の特大型、45～25cm 程度の大型、25～15cm 程度の中型、15cm 前後以下の小型がある。しかし、厳密な区分を行ったわけではない。

■1) 甕 A 中型から大型で、上げ底のものが多く小さい底部からやや直線的に立ち上がり、肩部は強く丸みを帯びて内湾し、そこから直線的に立ち上がる頸部をもつもの。いわゆる長頸甕（須藤隆 1970）の一種。頸部がほぼ垂直に立ち上がる A1 と外反もしくは外傾する A2 がある。また、島南西部では確認できないが、yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）の2期には内傾するもの（甕 B としたもの：第2図）があることから A3 とする。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式南川Ⅲ群期）まで確認できる。

■甕 B 中型から大型で、上げ底のものが多く小さい底部からやや直線的に立ち上がり、胴部上半にある肩部は丸みを帯び、そこから胴部上半は直線的に内傾し、口縁部は「くの字」に外傾するもの。肩部と胴部上半の境は粘土紐の接合と一致する場合が多く、そのため段状になるものが多い。いわゆる長頸甕の一種であるが、今回の検討により、恵山式に出現すると考えられる。

二段階（恵山式茂別期）から同（恵山式南川Ⅲ群期）まで確認できる。

■甕 C 中型から大型で、上げ底のものが多く小さい底部からやや丸みを帯びながら立ち上がり、砲弾型の胴部で、肩部は丸みを帯びて内湾し、口縁部は「くの字」に外傾するもの。いわゆる「くの字」甕。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階

(下添山式期) から三段階(恵山式南川Ⅳ群期) まで確認できる。

■甕 D (小型甕) 甕 B (長頸甕) を小型にした相似形のもの。

二段階(茂別期) から同(南川Ⅲ群期) まで確認できる。

■甕 E (小型甕) 甕 C (くの字甕) を小型にした相似形のもの。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階(下添山式期) から三段階(恵山式南川Ⅳ群期) まで確認できる。

■甕 F (特大型甕) 甕 B (長頸甕) を特大型にした相似形のもの。

二段階(恵山式南川Ⅲ群期) で確認できる。

#### 4.1.2 深鉢 (第 5・9 図)

法量により、器高 45cm 前後以上の特大型、45～25cm 程度の大型、25～15cm 程度の中型、15cm 前後以下の小型がある。しかし、厳密な区分を行ったわけではない。

今回の検討により深鉢を確認した。中部地域の江別太式や軽川式にみられる在地に系譜のある深鉢を、島南西部地域で製作したものとする。

■深鉢 A 小型で、上げ底の底部から直立気味に立ち上がり、体部は上半から内湾気味にやや丸みを帯びながら口縁部に向かって開く、倒鐘形である。

三段階(恵山式南川Ⅳ群期) で確認できる。

#### 4.1.3 浅鉢 (第 6・9 図)

■浅鉢 A 丸底気味の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部はそのまま開き、口縁部は短く強く外傾して開くものとそのまま立ち上がるものがある。

下添山遺跡では確認できていないが、二枚橋式などを出土する周辺の遺跡ではみられることから、一段階(下添山式期) から二段階(恵山式茂別期) まで確認できる。

■浅鉢 B 平底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みがあり、口縁部はそのまま内湾するもの。

一段階(下添山式期) から二段階(恵山式茂別期) まで確認できる。

#### 4.1.4 鉢 (第 6・9 図)

■鉢 A 丸底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みをもって内湾し、口縁部はくの字に短く外傾して開くもの。二段階(恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 B 平底の底部から丸みをもって立ち上がり、胴部は丸みがあり、口縁部はそのまま内湾するもの。二段階(恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 C 甕類を寸胴にしたもの。

二段階(恵山式南川Ⅲ群期) で確認できる。

■鉢 D やや幅広の山形の一つ突起をもつもの。島中部地域や島東北部の深鉢または鉢類の細別器種の影響を受けている可能性があるもの。

二段階(恵山式茂別期) で確認できる。

■鉢 E } 大型で、平底の底部からやや直線的に立ち上がり、胴部は胴部は丸みをもって内湾し、口縁部はそこから直線的に外傾して開くもの。口縁部の上部ではさらに直線的に外傾して開くものがある。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式茂別期）まで確認できる。

#### 4.1.5 台付鉢（第7・9図）

■台付鉢 A 低い台部を持つ鉢で、鉢部は大型である鉢 E となるもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

#### 4.1.6 高坏（第7図）

脚部は器高に対して、低めのものでハの字に直線的に開くものと直線状に開いた後屈曲して開くものと高い筒状のもので、そこから屈曲して開くものがある。

■高坏 A 高い脚部を持つもので、坏部は浅鉢 A となるもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■高坏 B 高い脚部を持つもので、坏部は鉢 F を扁平にした浅鉢となるもの。脚は高い筒状のもので、そこから屈曲して開く。

一段階（下添山式期）から二段階（恵山式茂別期）で確認できる。

#### 4.1.7 壺（第8図）

竪穴住居出土資料を対象としたため、土坑墓などから出土することの多い壺類は検討できた資料が少ない。今後の課題である。

■壺 A 中型から大型で、丸みを持った胴部から頸部は短く直立し、口縁部は外形して開くもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■壺 B 小型で、壺 A の相似形のもの。

一段階（下添山式期）で確認できる。

■壺 C 大型で、平底の底部からあまり広がらずに立ち上がり、胴部はあまり張らない長胴で、頸部はあまり締まらずに、口縁部はくの字に外傾して開くもの

二段階（恵山式茂別期）で確認できる。

#### 4.1.8 ミニチュア土器（第8・9図）

鉢・浅鉢・甕形のものがある。

二段階（恵山式茂別期）から同（南川IV群期）で確認できる。

#### 4.1.9 様式

前項までの検討により当該期の細別器種の集合体は、甕 A1・A2・B・C・D・E・F、深鉢 A、浅鉢 A・B、鉢 A・B・C・D・E・F、台付鉢 A、高坏 A・B、壺 A・B、ミニチュア土器の構成となる。主要な細別器種は、甕 A・B・C、浅鉢類、鉢類、高坏類である。

この土器群に一部で併行する中部地域の yubeot 時代初頭土器群様式（佐藤 2014）では深鉢 A～F、甕 A・B、広口壺 A・B、鉢 A～I、台付鉢 A、壺 A の構成であり、主要な細別器種は深鉢類と鉢である。

このように、島南西部地域における当該期の土器群の細別器種の構成は中部地域の yubeot 時代初頭土器群様式と細別器種はごく一部では共通するものの、主要な細別器種の構成はほとんどが異なっている。そのため、このような細別器種の構成を yaunmosir 島南西部地域弥生時代中期土器群様式と捉える。

なお、各遺跡の竪穴住居出土資料を対象としたため、特に土坑墓などから出土することの多い壺類などで検



討できた資料が少ない。また、様式の中半以降で併行すると考える中部地域の江別太式・軽川式土器群との比較は出来なかった。今後の課題である。

## 4.2 yaunmosir 島南西部地域弥生時代中期土器群様式の各段階（第9図）

### 4.2.1 一段階（中期前葉）

一段階は下添山式期である。中期前葉の二枚橋式・宇鉄Ⅱ式（斎野 2011）併行期である。甕 A1・A2 の長頸甕が成立し、東北地域北部とも斉一性が高い土器群である。

■下添山式期 下添山式期は下添山遺跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 A1・A2・C・E、浅鉢 A・B、鉢 E、台付鉢 A、高坏 A・B、壺 A・B の構成である。

### 4.2.2 二段階（中期中葉主体）

二段階は恵山式茂別期から南川Ⅲ群期である。甕 B の長頸甕が成立する、恵山式の成立期。

■恵山式茂別期 恵山式茂別期は茂別遺跡 H-2・H-3・H-4・H-9 出土資料を基準とする。

なお、H-9 については、出土している甕 A2 の頸部の無文帯が幅の狭いもので、高坏の脚部は器高に対して低めでハの字に直線的に開くもののため、古い様相と考え、H-3・9 期として位置付ける。

細別器種は甕 A1・A2・B・C・D・E、浅鉢 A・B・C、鉢 A・B・D・E、高坏 B、壺 C、ミニチュア土器の構成である。

■恵山式南川 3 群期 恵山式南川Ⅲ群期は瀬棚南川遺跡第 1・2・4・6・13 号竪穴住居跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 A1・A2・B・C・D・E・F、鉢 C、ミニチュア土器の構成である。

### 4.2.3 Ⅲ期（中期後葉主体）

Ⅲ期は恵山式南川Ⅳ群期である。甕類は甕 C・E は存続するが、甕 A1・A2・B が存続しない。ほかの細別器種数が減少している。中部地域の深鉢の細別器種と考える倒鐘形の深鉢 A がみられる。

■恵山式南川 4 群期 3 恵山式南川Ⅳ群期は瀬棚南川遺跡第 19・20・22 号竪穴住居跡出土資料を基準とする。

細別器種は甕 C・E、深鉢 A、鉢 C、ミニチュア土器の構成である。

## 4.3 各段階の甕類における主要な文様の施文位置の変化と無文帯の有無

甕 B は恵山式の成立である二段階（恵山式茂別期）に出現する主要な細別器種である。その主要な文様帯は、口縁部下端から胴部上半の段までであり、一段階（下添山式期）の甕 A の頸部にみられた文様帯と共通する。文様帯は無文になるものと自文に縄文をもつもの、多重の沈線文による文様をもつものがある。

甕 C の主要な文様帯は、二段階（恵山式南川Ⅲ群期）から口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半になり、二段階（恵山式茂別期）まで甕 B の口縁部下端から胴部上半の段までにみられた文様帯と共通する。三段階（恵山式南川Ⅳ群期）から、口縁部と胴部の屈曲部から胴部上半に沈線区画の带状縄文による文様をもつものが出現している。

大坂氏（2015）が恵山Ⅰ式と恵山Ⅱ式の区分で大きな基準とする甕の無文帯は、本稿ではⅡ期以降に消失すると考えられる。

## 4.4 いくつかの課題についての共有

### 4.4.1 遠賀川系土器について

遠賀川系土器については斎野裕彦氏（2011）による整理がある。佐藤由紀男氏（佐藤 2003）によれば国立療養所裏遺跡から類遠賀川系土器の鉢形土器が出土している。その特徴を引用すると、「口辺部のヨコナデ調整（佐藤 2002）が明瞭であり、沈線間にはハケ目かと思われる調整痕も認められる。」とする。

佐藤由紀男氏も指摘しているように、恵山式には口辺部のヨコナデ調整やハケ目はあまり顕著ではない。当該期の東北地域北部の資料との比較が必要である。

### 4.4.2 傾斜編年について

佐藤由紀男氏が編者となっている、『弥生土器』（佐藤由紀男編 2015）では地域ごとに様々な研究者が全国の弥生土器を検討している。弥生土器についての網羅的な検討であり、土器研究の上では非常に参考になる。しかし、そこに示された広域編年表では、東相模・南武蔵地域と仙台平野以北の地域では弥生中期から後期後半までの型式による編年対比が示されていない。このことは、編者に責があるのではなく、関東地域周辺と東北地域、yaunmosir 島地域での型式の共有がなされていないことが理由と考える。その原因を考えると、関東地域周辺では型式の細分が進んでいるものの、その共有についてはあまり配慮されていないのではないかとも思える。

私自身も弥生時代併行期の広域的な交流について、土器群による検討を目指したことがある。その際には、関東地域周辺の型式を介すると、各研究者がそれぞれで細分しているために型式の対比が難しくなり、段差のついた型式対比しか行えなくなった。このようなことを行うと、傾斜編年になってしまうため、私は断念した。ほかの研究者の方も同じような経験をされた方が多いのではないかと思う。本来はシンポジウムなどで解消され、共有がなされると考えるが、これまでも同様のことが繰り返されてきたのではないだろうか。斎野氏（斎野 2011）による東北地域の土器群の検討は編年表で各地域の型式が対比されており、原則的には型式間での段差はみられない。このことは、厳密には関東地域南西部を介さずに北陸地域と関東地域東部を経由して近畿地域以西との対比を行ったものとする。

私は研究の多様性は理解するものの、それは研究者間での共有により担保されるものとする。このようなことは記載すべきことではないのかもしれないが、当該期の土器研究とともに、考古学研究についての本質的な課題と考えるため、提示する。

## 5 まとめ

本稿では前稿の補足を行い、yaunmosiri 島南西部地域における弥生時代中期土器群様式を提示した。

これまでの概説は、私の力量の及ぶ範囲内でのものであり、遺漏と誤読が多いことと思う。また、今回の土器群の検討では、時間的な制約もあることから、特に東北地域との対比に必要な近年に増加した資料の実見など、私自身が検討しきれていないものが多い。筆者の力量によるもののため、ご容赦頂きたい。様々な立場からの忌憚のないご意見とご教示、今後のご検討をいただければ幸いです。

## 謝辞

昨年に引き続き、二度にわたる講演の機会をいただきました、南北海道考古学情報交換会の事務局に感謝を申し上げます。現在は鬼籍に入られておられる石本省三氏と千代肇先生と、現在も精力的に研究を進めておられる横山英介氏からの学恩に感謝申し上げます。また、これまでの資料の実見などの際にともに検討を行っていただいた諸研究者の方々にも感謝いたします。身に余る思いを感じつつ、十分にその責に応えることが出来

たかは心許ありませんが、現状での私なりの理解を示したことで、その任を終えたいと思います。

## 註

- 1) 「yaunmosir (ヤウンモシリ・北海道) 島」の表記については、北海道大学先住民・アイヌ研究センター 北原モコットゥナシ氏のご教示による。記して感謝を申し上げます。

## 引用文献

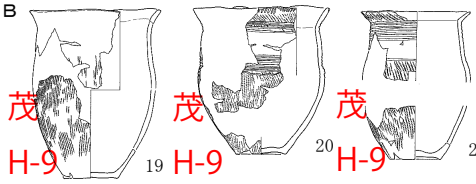
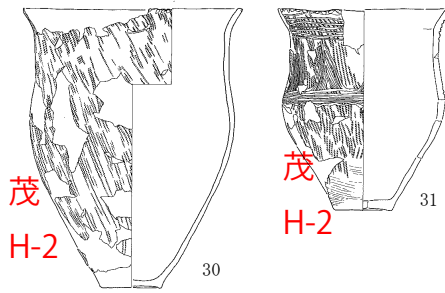
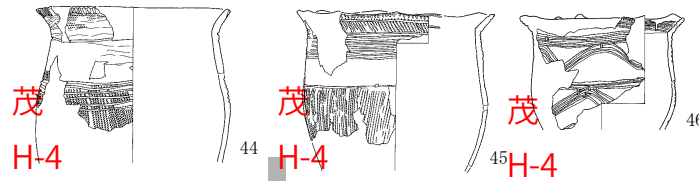
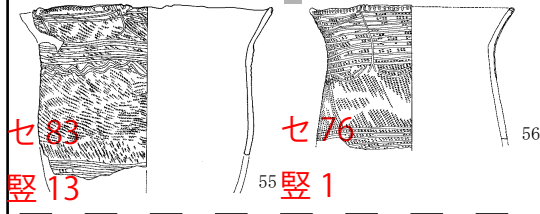
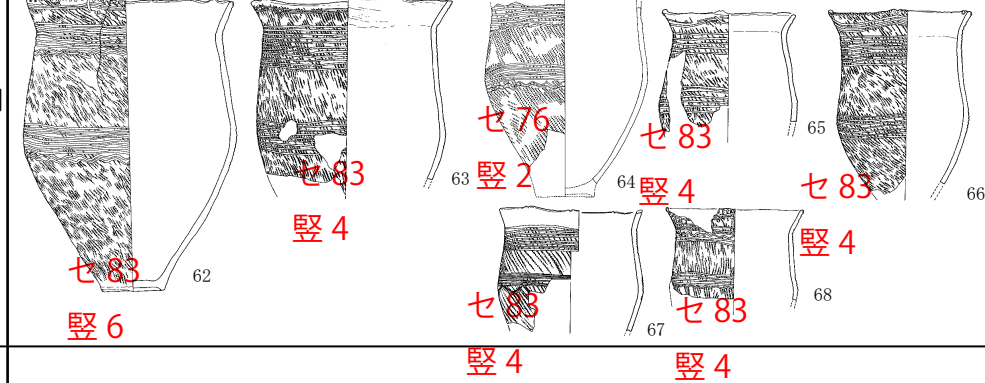

- 大坂 拓 2007 「恵山式土器の編年」『駿台史学』第 130 号 53～83 頁
- 大坂 拓 2010 「続縄文時代前半期土器群と本州島東北弥生土器の並行関係」『北海道考古学』第 46 輯 89～104 頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2011 「後北式土器拡散開始期における集団移動の様相-日本列島北部弥生古墳移行期の土器型式分布圏変動過程とその背景 (1)」『考古学集刊』第 7 号 39～61 頁
- 大坂 拓 2013 「後北式土器再論」『北海道考古学』第 49 輯 51～68 頁 北海道考古学会編
- 大坂 拓 2015 「北海道 (南部・中央部)」『弥生土器』 447～473 頁 佐藤由紀男編 ニュー・サイエンス社
- 加藤博文・若園雄志郎編 2018 「まえがき」『いま学ぶ アイヌ民族の歴史』 I～III 頁 山川出版社
- 工藤研治 1998 「VII まとめ 2 土器」『北斗市 茂別遺跡』第 121 集 625-626 頁 (公財) 北海道埋蔵文化財センター
- (公財) 北海道埋蔵文化財センター 1998 『上磯町 (現北斗市) 茂別遺跡』第 121 集
- 斎野裕彦 2011 「第 1 章 弥生文化の地域的様相と発展 十 東北地域」『講座日本の考古学 弥生時代 (上)』5 430～482 頁 青木書店
- 佐藤 剛 2011 「続縄文時代初頭の土器群の時期区分について」『北方島文化研究』第 9 号 1～14 頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2014 「続縄文時代初頭の土器群の細分について」『北方島文化研究』11 号 41～49 頁 北海道出版企画センター
- 佐藤 剛 2020a 「接触・緩衝地帯 (フロンティア) (西川 2019) について」『弥生時代の東西交流～広域的な連動性を考える～』考古学リーダー 27 西相模考古学研究会・兵庫考古学談話会編 六一書房
- 佐藤 剛 2020b 「続縄文時代前半期の土器研究の現状について」『靫』10 号 弥生時代研究会編
- 佐藤 剛 2021 「ユベオッ (続縄文) 時代の概説」『第 41 回 南北海道考古学情報交換会講演資料』1～33 頁 (<https://ishijunpei.github.io/dkouko2020/>)
- 佐藤祐輔 2015 「東北」『弥生土器』 397～446 頁 佐藤由紀男編 ニュー・サイエンス社
- 佐藤由紀男 2003 「『恵山式土器』『恵山文化』の成立に関わる一試論」『立命館大学考古学論集Ⅱ論集』 367～382 頁 立命館大学考古学論集刊行会編
- 佐藤由紀男編 2015 『弥生土器』 ニュー・サイエンス社
- 須藤 隆 1970 「青森県大畑町二枚橋遺跡出土の土器・石器について」『考古学雑誌』第 56 巻第 2 号 10～65 頁 日本考古学会編 学生社
- 瀬棚町 (現せたな町) 教育委員会 1976 『瀬棚南川遺跡』
- 高瀬克範 1998 「恵山式土器群の成立・拡散とその背景」『北海道考古学』第 34 輯 21～41 頁 北海道考古学会編
- 高瀬克範 2014 「続縄文文化の資源・土地利用」『農耕社会の成立と展開-弥生時代像の再構築-』国立歴史民俗博物館研究報告第 185 集



|     |       |       |        |   |
|-----|-------|-------|--------|---|
|     |       |       |        | 甕 |
| 一段階 | 下添山式  | 下添山式期 | A1     |   |
| 二段階 | 惠山式   | 茂別期   | H-3・9期 |   |
|     |       |       | H-2期   |   |
|     |       |       | H-4期   |   |
|     |       | 南川Ⅲ群期 | I A期   |   |
| 三段階 | 南川Ⅳ群期 | Ⅱ期    | I B期   |   |
|     |       |       |        |   |

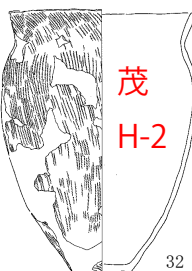

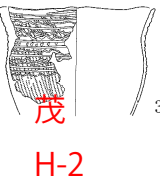
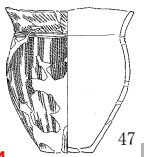
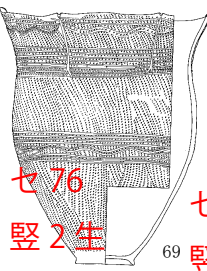
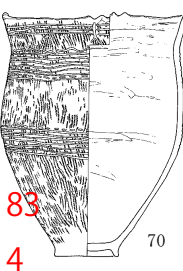


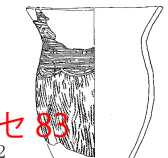

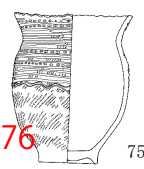
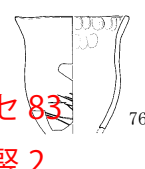

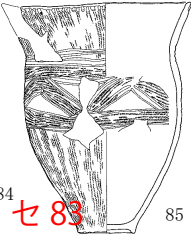
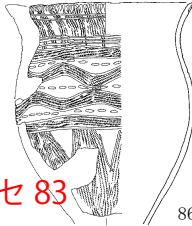
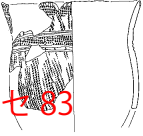
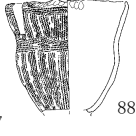
S=1/10

第 2 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (1)


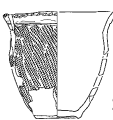





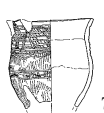

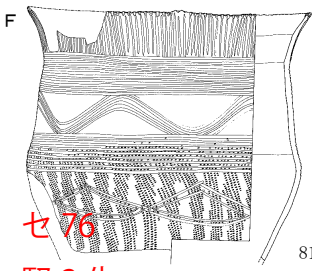


|     |      |       |   |   |
|-----|------|-------|---|---|
|     |      |       |   | 甕 |
| 一段階 | 下添山式 | 下添山式期 |   |   |
| 二段階 | 惠山式  | 茂別期   | H-3・9期<br><br>H-2期<br><br>H-4期<br> |   |
|     |      | 南川Ⅲ群期 | I A期<br><br>I B期<br>   |   |
| 三段階 |      | 南川Ⅳ群期 | II期<br>   |   |

S=1/10

第 3 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (2)

|     |      |        |       |  |
|-----|------|--------|-------|--|
|     |      |        |       | 甕  |
| 一段階 | 下添山式 | 下添山式期  |       |  |
| 二段階 | 恵山式  | H-3・9期 |       |  |
|     |      | 茂別期    | H-2期  |     |
|     |      | H-4期   |       |    |
|     |      | I A期   |       |  |
| 二段階 | 恵山式  | I B期   | 南川Ⅲ群期 |         |
|     |      | II期    | 南川Ⅳ群期 |        |
| 三段階 |      |        |       | S=1/10   |

第4図 yaunmosir(北海道)島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図(3)

|     |       |        | 甕   | 深鉢  |   |   |  |
|-----|-------|--------|---|---|---|---|--|
| 一段階 | 下添山式  | 下添山式期  |   |   |   |   |  |
| 二段階 | 惠山式   | H 3・9期 | <div>D</div> <div></div> <div>茂</div> <div>H-9</div> <div>22</div> | <div>E</div> <div></div> <div>茂</div> <div>H-9</div> <div>23</div>                       | <div></div> <div>茂</div> <div>H-9</div> <div>24</div>     |   |  |
|     |       | H 2期   | <div></div> <div>茂</div> <div>H-2</div> <div>35</div>              | <div></div> <div>茂</div> <div>H-2</div> <div>36</div>                                    |   |   |  |
|     |       | H 4期   |   |   |   |   |  |
|     |       | I A期   |   |   |   |   |  |
| 三段階 | 南川Ⅳ群期 | I B期   | <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 4</div> <div>77</div>         | <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 6</div> <div>78</div>                               | <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 6</div> <div>79</div> | <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 4</div> <div>80</div> | <div>F</div> <div></div> <div>セ 76</div> <div>豎 2 生</div> <div>81</div> |
|     |       | Ⅱ期     | <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 22</div> <div>89</div>        | <div>A</div> <div></div> <div>セ 83</div> <div>豎 22</div> <div>深鉢</div> <div>90</div> | S=1/10  |   |  |

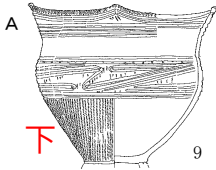
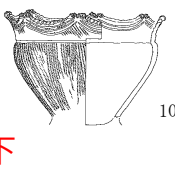
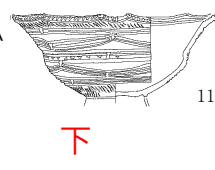
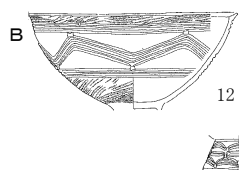
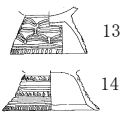
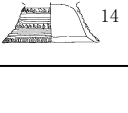
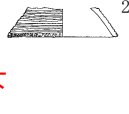
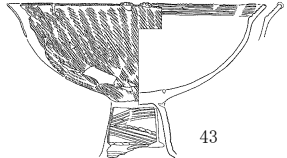

第 5 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (4)



|     |       |       |        | 浅鉢   | 鉢  |
|-----|-------|-------|--------|--|--|
| 一段階 | 下添山式  | 下添山式期 |        |  |  |
|     |       |       |        | 下包<br>B 7                                  | 茂<br>H-9<br>E 8<br>下包                      |
|     |       |       |        |  |  |
| 二段階 | 恵山式   | 茂別期   | H-3・9期 | 茂<br>H-9<br>覆下<br>C 25<br>26               | 茂<br>H-9<br>覆下<br>D 27                     |
|     |       |       | H-2期   | 茂<br>H-2<br>A 37<br>B 38<br>茂<br>H-2<br>39 | 茂<br>H-2<br>A 40<br>B 41<br>茂<br>H-2<br>42 |
|     |       |       | H-4期   | 茂<br>H-4<br>A 48<br>B 49<br>茂<br>H-4<br>50 | 茂<br>H-4<br>B 51                           |
|     |       |       |        | 茂<br>H-4                                   |  |
|     |       |       | 南川Ⅲ群期  |  | セ 76<br>豎 1<br>C 57                        |
| 三段階 | 南川Ⅳ群期 | Ⅱ期    | ⅠA期    |  | セ 76<br>豎 2 生<br>B 82                      |
|     |       |       | ⅠB期    |  |  |
|     |       |       | Ⅱ期     | セ 83<br>豎 20<br>セ 83<br>豎 20<br>91<br>92   |  |

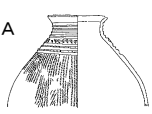

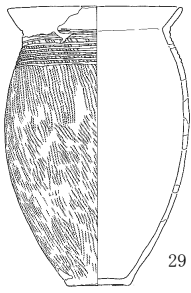



S=1/10

第 6 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (5)

|     |       | 台付鉢    | 高坏  |
|-----|-------|--------|---|
| 一段階 | 下添山式  | 下添山式期  | <div>       </div> |
|     | 下添山式  | 下添山式期  |   |
| 二段階 | 惠山式   | H-3・9期 | <div>  </div>  |
|     |       | H-2期   | <div>  </div>  |
|     |       | H-4期   | <div>  </div>   |
|     | 南川Ⅲ群期 | I A期   |   |
| 三段階 | 南川Ⅳ群期 | Ⅱ期     |   |

S=1/10

第 7 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (6)

|     |        |        |         |   |       |
|-----|--------|--------|---------|---|-------|
|     |        |        |         | 壺   | ミニチュア |
| 一段階 | 下添山式   | 下添山式期  |         |  <br>下<br>包 |       |
| 二段階 | 恵山式    | H-3・9期 | 茂別期     | <br>茂<br>H-9<br>覆下   |       |
|     |        | H-2期   |         |   |       |
|     |        | H-4期   |         | 茂<br>H-4  53   |       |
| 三段階 | 南川IV群期 | I A期   | 南川III群期 |   |       |
|     |        | I B期   |         | セ 83<br>豎 4  83  |       |
|     |        | II期    |         | セ 83<br>豎 22  93   |       |

S=1/10

第 8 図 yaunmosir (北海道) 島南西部地域の弥生時代中期の土器変遷図 (7)

|     |       |           |  | 甕 A 1 | 甕 A 2 | 甕 B | 甕 C | 甕 D | 甕 E | 甕 F | 深鉢 A | 浅鉢 A | 浅鉢 B | 浅鉢 C | 鉢 A | 鉢 B | 鉢 C | 鉢 D | 鉢 E | 台付鉢 A | 高坏 A | 高坏 B | 壺 A | 壺 B | 壺 C | ミニチュア |
|-----|-------|-----------|--|-------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|------|------|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-------|------|------|-----|-----|-----|-------|
| 一段階 | 下添山式  | 下添山式期     |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
| 二段階 | 恵山式   | H 1・3・9 期 |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
|     |       | H 1・2 期   |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
|     |       | H 1・4 期   |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
|     |       | I A 期     |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
|     |       | I B 期     |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |
| 三段階 | 南川Ⅳ群期 | Ⅱ期        |  |       |       |     |     |     |     |     |      |      |      |      |     |     |     |     |     |       |      |      |     |     |     |       |

第 9 図 細別器種の消長表